

國學院大學學術情報リポジトリ

複合辞ベカメリについて：証拠性の変質

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 清, Miyake, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000708

複合辞ベカメリについて

— 証拠性の変質 —

三宅 清

1 はじめに

メリは、例えば近藤泰弘（2000）では、終止ナリ、ラムなどと共に証拠的な助動詞とされている。

平安時代には「めり」（視覚による）「なり」（伝聞による）「らむ」（直接見ない）など、明らかに証拠的（evidential）なものが多くの助動詞の中に存在しており、

本稿では、メリが助動詞ベシと複合したベカメリについて、メリの証拠性がどのように変質したかを考察するものである。筆者は、嘗てベカメリについて考察し（三宅清（1993））、証拠性からメリと終止ナリについて考察した（三宅清（2005））が、それらも参考にする。メリの証拠性の指摘は前掲の近藤泰弘（2000）があるが、ベカメリの証拠性に触れた論は、管見の限りみられない。

研究方法としては、メリの証拠性について調査し、その結果をベカメリの証拠性と比較する。メリは、その意味を大きく「婉曲」と「推量（推定）」に分けて論を進めていく⁽¹⁾。

資料は源氏物語を用いる⁽²⁾。源氏にはベカメリが148例みられる。メリは978例みられるが、ベカメリとほぼ同数（161例）の松風巻までとする。

また、ベカメリと語構成が似た複合辞に、ベシと終止ナリが複合したベカナリがあるが、源氏でも10例のみと少ないので、最後に簡単に触れる。

メリの大きな意味として、婉曲と推量があるが、『日本国語大辞典』（第二版・小学館）にも「推量の用法と婉曲の用法とは明白には区別しにくい面がある」と触れられているように区別しにくい。以下に述べるように、本稿では敢えて婉曲と推量（以下、推定）を分けて記述する。

2 メリの類型—婉曲—

本節では、調査したメリの用例から、何を基（証拠）にメリと判断しているかを改めてみていく。

①視覚

1 人々はかへし給ひて、惟光の朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも、仏据ゑ奉りて行ふ、尼なりけり。簾少し上げて花奉るめり。中の柱に寄りゐて、脇息の上に経を置きて、いと悩ましげに読みみたる尼君、ただ人と見えず。

（若紫155・14）

<源氏が惟光と覗くと、・・・尼が花を供えている>

2 尼君の見上げたるに、少しおぼえたる所あれば、子なめりと見給ふ。（若紫156・10）

<尼君が見上げたところ、少し似た所があるので、「これは尼君の）娘なのか」と源氏は御覧になる>

3 御髪の常よりも清らに見ゆるを、かき撫で給ひて、「久しうそぎ給はざめるを、今日はよき日ならむかし」とて、暦の博士召して、時間はせなどし給ふ程に（葵290・7）

<髪がいつもより美しく見えるのを、・・・「（その髪は）しばらく削いでいない・・・」>

4 母屋の中柱にそばめる人や我が心がくると、まづ目とどめ給へば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ、上に着て、頭つき細やかに、小さき人の物げなき姿ぞしたる。（空蝉87・1）

<母屋の中柱の所に横向きにいる人が、自分が心を寄せている人かと、目を付けると、濃い紫の綾の単衣襲である>

5 「それなむ又え生くまじく侍るめる。我も後れじ」と惑ひ侍りて、今朝は谷に落ち入りぬとなむ見給へつる。（夕顔131・10）

<それがまた、（右近は）「生きてはいられそうもない。自分（右近）もあとを追おう」とうろたえておりまして、今朝などは谷に落ちてしまいそうに見えました。>

6 「曇りがちに侍るめり。客人の来むと侍りつる、厭ひ顔にもこそ、今、心のどかにを。御格子参りなむ」とて、いたうもそそのかさで帰りたれば、（末摘花204・4）

<「格子を下します」と話し手の命婦が言っているのは、空を見て、「曇りがちである」から>

1～6は、各々波線部などからも分るように、視覚によって、メリに上接する事態を判断している、すなわち視覚そのものが証拠となっている例である。視覚

による判断は、例えば聴覚による判断に比べると、その判断対象（例えば1では「花奉る」）の成立は話し手、作者にとって確かなものである。すなわち断定してもよいことであり、その場合のメリは、「婉曲」といえる。もちろん、視覚は証拠であり、例えば万葉集の次例の「見ゆ」のような直接的に視覚のみを表すわけではない。

*旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほ船沖を漕ぐ見ゆ（270番歌）

②視覚—知識が基になっている場合

7 前の世の契り知らるる身の憂さに行く末かねて頼みがたさよ

かやうの筋なども、さるは心もとなかめり。（夕顔118・13）

<こうした（歌の）方面も、これでは実のところ、頼りなさそうに思われる>
→話し手の源氏が歌を見る→源氏の知識を基にして、その歌は頼りない（下手だ）と判断している。それは、源氏にとって確かなことである。

8「さるは、好き好きしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、又こなたかなたの人々などなべてならずなども、見え聞えざるを、いかなるもの隈に隠れ歩き、かく人にも恨みらるらむ」と宣はす。（紅葉賀253・11）

<そうはいつでも、好きがましく乱れたふるまいをして、この辺の女房に対して、また、あちこちも女房たちにも、とくに打ち込んでいたふうにも見えないし、その噂もないようなのを、いったいどのような人目の届かぬ所を忍び歩いて、これほど人に恨まれたりするのだろうか>と仰せになる。>

→話し手の帝が源氏（源氏を取り巻く状況）を見る→帝の知識を基にして、それは「見え聞えず」と判断→（帝の知識）にとってそれは確かなことである。

9「もし見給へ得る事もや侍ると、はかなきついで作り出でて、消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口疾く返事などし侍りき。いとくちをしうはあらぬ若人どもなむ侍める」と聞ゆれば、（夕顔107・7）

→字も上手く、返事も早い。→それらのことから（見て）、話し手の惟光が、自分の知識から、「いとくちをしうはあらぬ若人どもなむ侍」と判断。→話し手にとって、確かなことである。

10さらば、時雨も隙なく侍めるを、暮れぬ程に」とそそのかし聞え給ふ。（葵315・9）

→話し手の左大臣は時雨を見て、自分の知識に照らし合わせて、「暮れぬ程に」と言っている。→左大臣にとって、「時雨も隙なく侍」は確かなことである。

③知識

11まなまの上達部よりも、非参議の四位どもの、世のおほえ口惜しからず、もとの根ざし賤しからぬ、安らかに身をもてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや、家の内に足らぬ事などはたなかめるままに、省かず、眩きまでもて

かしづける女などの、貶めがたく生ひ出づるも数多あるべし。(帚木39・11)
 <・・・家の中にはまた、不足なことも何一つないから、手を抜かず、まぶしいほど大切に育て上げた娘などの、けちのつけようもないくらい立派に成人するという例も多いだろう>

12すくよかならぬ山の気色、木深く、世離れてたたみなし、気近き籬の中をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢殊に、わろ物は及ばぬ所多かめる。(帚木47・13)

<・・・名人はほんとうに筆勢が格別で、普通の絵師は及ばぬところが多い>
 13「中宮の今夜まで給ふなる、とぶらひにもし侍らむ。院の宣はせ置く事侍りしかば、又後見仕うまつる人も侍らざめるに、東宮の御ゆかり、いとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。(賢木361・11)

<・・・ほかには後見申しあげる方もいないので、東宮のご縁からも(宮が)お気の毒に存ぜられて>

11、12、13のメリに上接する事態(特に傍点の箇所)は、話し手、作者の知識に拠るものであり、話し手、作者の中では、確かなことである。

④状況

14御子は、およすけ給ふ月日に随ひて、いと見奉り分きがたげなるを、宮、いと苦しと思せど、思ひ寄る人なきなめりかし。(紅葉賀263・2)

<御子のご成長あそばす月日につれて、まったく(源氏と)お見分け申しにくいほどでいらっしゃるのを、(藤壺の)宮はまことに苦しくお思いでいらっしゃるけれども、(それと)気づく人もいない>

15宿曜に、「御子三人、帝后必ず並びて生れ給ふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」と勸へ申したりし事、さして叶ふなめり。(滯標487・13)

<宿曜の占いで、「御子三人、帝、后が必ずそろってお生れになるでしょう。そのうちの低いお方は、太政大臣として位をきわめるはずです」と勸え申しあげていたことがかなう>

14、15は地の文(14は草子地)で、メリに上接する事態は、作者がある状況を俯瞰しているような事態である。作者が見ているかのように、知っているかのように描写している⁽³⁾。

以上のように、メリに上接する事態は、話し手、作者にとって確かな(断定してもよい)ことであり、推定の余地が少ないので、推定か婉曲かといえは、婉曲ととるべきであろう。

上述の各類型の用例数を示さなかったのは、各類型に意味の連続性がみられるためである(つまり、どちらにも属する例もある)。例えば、①「視覚」を知識に照らし合わせて述べれば②「知識が基になっている場合」となるし、③「知識」が個人的なものではなく、世間一般のものならば、「一般論」となる。また、広く俯瞰しているような場合は④「状況」となる。

①視覚→②知識が基の視覚→③知識（経験等）→一般論→④状況

「知識」「経験」などが「証拠性」に当たるのか、疑問もあるが、上の図は右に移行するに従って、証拠性は漠然として（抽象的になって）いくといえるのではないか。

ベカメリと比較するために、敢えて多い、少ないをいえば、メリは①「視覚」が最も多い⁽⁴⁾。

3 メリの類型—推定—

ここでは、推定の一つの指標として、メリに上接する他者の心中を表す表現を取り上げる。

メリの上接表現で、他者の心中を表すものを次に挙げる⁽⁵⁾。

思す（4） 思ふ（3） 御心（2） 嘆く（2） 悔る（心を）動かす
 思し急ぐ 思し疎む 思し足らず 思しつつむ 思し嘆く 思ひ嘆く
 思ひ悩む 思ひ沈む 思ひ直す 思ほゆ 心もとなし 心ゆかぬ さう
 ざうしげなり もて悩む（心苦しげに）物す（御心）寄す

161例中29例（18・0％）みられる。

16大将の君の御息所、ここかしこと思しあつるに、「この御息所、二条の君などばかりこそは、おしなべての様には思したらざめれば、恨みの心も深からめ」とささめきて、物など問はせ給へど、さして聞こえあつる事もなし。（葵293・13）

<大将の君の通い所を、あれこれと見当をおつけになって、「この御息所、また二条院の君などぐらいは、（君が）並々の様子にはおほしめしではないお方なので、（こちらの女君への）恨みも深いだろう」とひそひそ噂して、何かと占わせなどなさるが、それほど言い当て申すこともない>

メリに上接する「思したらず」は源氏の行為なので、話し手の御息所からは他者の心中で、不確かなこと、すなわち推定である。

17それもいと見苦しきに住みわび給ひて、山里に移ろひなむと思したりしを、今年よりは塞がりける方に侍りければ、違ふとて、あやしき所に物し給ひしを、見あらはせ奉りぬることと、思し嘆くめりし。（夕顔139・6）

<そこもひどく見苦しい所なので、お住いになりにくくて、山里にでも移ってしまおうとのお考えでございましたが、今年から方角がふさがっていたものですから、方違えにということで、むさ苦しい所にお住いでいらっしゃる所を見つけれ申してしまつたと、お嘆きのご様子でした>

17は右近から源氏への発話で、メリに上接する「思し嘆く」は夕顔の心中であり、話し手の右近が他者である夕顔の心中を、メリで表している。他者の心中は

不確かなことである。

18いとらうたきものに思ひ聞え給へりしかど、我が身の程の心もとなさを思す
めりしに、命さへ堪へ給はずなりにし後、はかなきものの便りにて、頭の中
将なむまだ少将に物し給ひし時 (夕顔138・12)

< (女君を) たいそうおかわいがりにお思い申しあげていらっしやっただが、
ご自分の身の程の頼りないことをお悩みのご様子でしたところ、(そのう
ち) ご寿命までもまっとうされず、お亡くなりになった後、ちょっとした
ご縁で、頭の中将がまだ少将でいらっしやった時分>

18は地の文である。メリに上接する「我が身の程の心もとなさを思す」は、作
者にとって設定された他者である (女君) の心中は不確かな事態であり、不確か
なこと=推定といえる。16~18に共通するのは、話し手、作者が他者の心中をメ
リで表していることである。

話し手、作者の想像の中で、他者の心中 (= 命題) が真であると判断している
ので、婉曲か推定かといえば、推定といえる。推定には「不確かさ」が伴う。

4 ベカメリについて

ベカメリで最も多いのは、メリの種類で示した中では「推定」である。メリと
同じように、ベカメリの上接表現で、他者の心中を表すものを挙げると、次のよ
うに141例中67例 (47・5%) みられる。

思す (14) 思ふ (12) おぼゆ (6) 思ひくたす (2) 思ひなす (2) 憎む (2)
惜しむ (2) 挑む 言ひ思ふ 疎む 恨む 愁ふ 思し絶ゆ 思しなす 思
し宣ふ 思はゆ 思ひ砕く (心) 動かす (御思ひの) 添ふ (御心も) 添ふ
(御志) まさる (心遣ひ) す (心地) す 心す (心ばせ) あり 心安し (心
の深う) しむ 好く そねむ (涙の) 落つ 涙落す 念ず (用意) す 推
し量る

19かく山深く尋ね聞えさせ給ふめる御心ざしの年経て見奉り馴れ給へる、けは
ひも疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はとさまかうごまにこまかなる筋聞え通
ひ給ふめる、かの御方をさやうにおもむけて聞え給はば、となむ思すベカめ
る。(総角1591・13)

<このように山深くお尋ね申しあげなさいますお気持は、(姫君たちだつて)
長年の間ずっと拝見していらっしやいまして、親しげにお思い申してい
らっしやって、今はあれこれ立ち入った筋の事をご相談申し上げていらっ
しやるようでございますが、あの妹君の方をそのように差し向けて申しあ
げるなさるなら、と(姫君は) お考えです。>

19は、弁と薫の会話である。話し手の弁が、姉君がそう思っている、と想像し
ている。

20宮もまめだち給ひて、「まことにつらしと思ひ聞ゆる事もあらむは、いかが思さるべき。まろは御為におろかなる人かは。人も、『ありがたし』など咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひ貶し給ふべかかめり。それもさるべきにこそはとことわらるるを、隔て給ふ御心の深きなむいと心憂き」と宣ふにも（浮舟1882・14）

<宮も真剣になられて、「(私が) うらめしく思い申ししていることもあるなら、どうお思いになりますか。私は、あなたにとっていいかげんな夫だろうか。世間の人も、(ああまでする人は) めったにいないなどと咎めるくらいなのです。(それなのに、) (あなたは私の事を) 人と比べてまったく見下していらっしゃる。それもやはり前世の約束事なのだろうと理屈はつけられるものの、(私に) 隔てを置かれるお心の深いのがほんとうに情なくなる」とおっしゃるにつけても>

20は匂宮と中の君の会話で、中の君が、匂宮を、心の中で見下していると想像している。

21さりとして、かかる有様も悪しき事はなけれど、この大臣の御心ばへむつかしく心づきなきも、いかなるついでにかは、もて離れて、人の推し量るべかめる筋を心清くもありはつべき（藤袴917・10）

<そうかといって、現在こうしてこのお邸で過ごしているのも不都合ではないけれど、この大臣のお心向けが悩みの種で厭わしいにつけても、いったいどのような機会にこの状態から抜け出して、人から変に疑いをかけられているらしいこの関係をきれいさっぱりと清算できるというのか>

21は玉鬘の心中で、源氏と自分との関係を世間の人々から疑いをかけられていることを悩んでいる。ベカメリに上接する「推し量る」は玉鬘にとっては、世間の人々―他者の心中であり、不確かなことである。

22広陵といふ手を、ある限り引きすまし給へるに、かの岡辺の家も、松の響、波の音にあひて、心ばせある若人は、身にしみて思ふべかめり。(明石453・8)

<広陵という曲を、精一杯、澄みきった（音色に）弾いていらっしゃると、あの岡辺の家でも、松風の響きや波の音といっしょになって、心得のある若い女房たちは、身にしみて感じ入る。>

22は地の文で、作者が女房たちの心中を想像しているように描写している。

ベカメリは、前述のメリの類型でいえば、次の例のような「知識」（傍点箇所）や、あるいは、27のような「一般論」の例はみられるが、明らかな「視覚」を証拠とする例はみられず、28、29、30のような「見ているかのような」例がみられる。

○知識

23山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御かたちのまほにうつくしげにて、限りなくいつき据ゑたらむ姫君も、かばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの我が方様のいといつくしきぞかし、こまやかなる匂など、うち解けて見ま

ほしく、中々なる心地す。(総角・1629・8)

<山際の光がだんだんと見えてくると、女君(中の君)のご容貌のほんとうに美しくて、どこまでも大事にかしずかれています姫君でもこれほどのご容貌でいらっしゃるまい。>

24「後安く仕うまつれ。何事も、もとよりかやすく世に聞えあるまじき際の入は、末の衰も常の事にて、紛れぬべかめり。(権本1558・13)

<不安のないよう姫君たちにお仕えしなさい。もともと軽々しく世間の噂にものほらないような身分の者であったら、子孫が衰えていくのも当り前の事で人目に立つこともない。>

25昔の懸想のをかきいどみには、あた人といふ五文字を休めどころにうち置きて、言の葉の続き、頼りある心地すべかめり」など、笑ひ給ふ。(玉鬘755・14)

<昔の恋の風流なやりとりには、『あだ人の』という五文字を第三句に置いておけば、言葉の続き具合がよいという気がする』などとお笑いになる。>

26この人々は、皆思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓のうちなる程は、程に随ひて、ゆかしく思ふべかめるわぎなれば、この家のおほえ、内々のくだくだしき程よりは、いと世に過ぎて、ことことしくなむ言ひ思ひなすべかめる。(常夏83・3)

<(女は)普通の身分の女でも、深窓に隠れている間は、その身の程によつて、(男は)心ひかれるものだから、>

27常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまづはるる限りなむ、所せく捨てがたく、我も人も思すべかめることなめる。(手習2036・12)

<現世に生れ育つて、世間の榮華を願ひ執着している限りは、それに束縛されて(この世を)捨てにくいものと誰しもお思いになる>

○見ているかのよう

28げにそこはかたなく書き乱り給へるしもぞ、いと見まほしき側目なるを、いとよなき御志の程と、人々見奉る、各々故郷に心細げなる言伝すべかめり。(明石450・13)

<なるほどとりとめもなく書き散していらっしゃるのが、まったくはたからのぞいてみたくなるくらいなので、ほんとうにこの上もないお志の深さなのだ、お供の人々はお察し申し上げる。それぞれ故郷に、心細い便りを言い伝えている>

29遊女どもの集ひ参れる、上達部と聞ゆれど、若やかに事好ましげなるは、皆目とどめ給ふべかめり。(漂標503・9)

<遊女たちが集まっているにつけても、上達部と申しても年若の風流好きな人々は、皆(好奇の)目をとめていらっしゃる>

30いとかうまさなきまで、古への墨書きの上手ども、跡をくらうなしつべかめ

るは、却りてけしからぬわざなり」と、うち乱れて聞え給ひて（絵合572・12）

くまことにこんなに不都合なくらい、昔の墨書きの名人たちが逃げ出してしまいたくなる程（お上手）なのは、却ってよくないことだ>

28、29、30は地の文である。メリの④「状況」でも触れたように、作者が状況を俯瞰しているように描写されている。「見ているかのよう」である。

メリとベカメリとの最も大きな違いは、ベカメリに視覚による判断がみられないことである。メリの最も基本的な証拠性である①「視覚」―「見て」判断する一が消失したのはベシの影響と思われる。「見て」判断するということは、その判断に不確かさが伴いにくい。それに対し、上述の他者の心中は、話し手、作者にとって不確かながらである。それがベシの意味の一つの推定、すなわち不確かさを伴う意味に通じるのではないか。地の文の場合は、作者が、敢えて登場人物の心中を不確かさな事として描写していると考えられる。

また、婉曲と推定とが区別しにくいのは、婉曲は断定を避ける。それは命題に人為的な不確かさを加えるものである。そして推定もその命題が想像上のものであることにより、不確かさを伴う。そのような不確かさという共通点があるからではないか。

5 ベカナリについて

本節では、ベカメリと語構成の似た、やはり推定の助動詞が複合したベカナリについて簡単に触れる。次に挙げる10例みられる。

31「宮へ渡らせ給ふべかなるを、その先に聞え置かむとてなむ」（若紫189・10）

<父宮の所へお移りになるので、その前に申しあげておこうと思ひまして>

32「殿は御女まうけ給ふべかなり。あなめでたや。（行幸908・3）

<「殿は姫君をお迎えになる。まあ、お幸せなこと。>

33「あなかま。皆聞きて侍り。内侍のかみになるべかなり。（行幸908・8）

<「まあ、おだまりなさい。（私は）何もかも聞いているのです。（その方が）内侍になるそうではありませんか。>

34俄にうち続くべかなるよみちの急ぎは、さこそは契り聞えしか」と、いとつれなく言ひて（夕霧1364・7）

<（どちらかが先に死んだとき）すぐ後に続いて冥土の旅を一緒にとおっしゃるのは、（これまで私の方で）そうお約束申しあげたことでした」と、まったく取り合う様子もなく言つて>

35「かの宮の御忍び歩き制せられ給ひて、内裏にのみ籠りおはします。左の大
臣殿の君をあはせ奉り給へるなる、女方は年頃の御本意なれば、思し滞る事

なくて、年の内にありぬべかなり。(総角1648・3)

<「あの宮がお忍び歩きをさしとめられていらっしやって、(今は) 宮中にばかり閉じこもっておいでになるのです。左大臣殿の姫君を娶せ申しあげるなさるようなのですが、女君方では長年のご希望なのだから思いためらうこともなく、きっと年内に(ご婚儀が) ある>

36と思しつるを、思ひの外の事出で来ぬべかなり、と妬く思されければ(宿木1705・13)

<と置いていらっしやったところが、意外な事態が出来してしまう、といまいましくお思いになったので、>

37この母君、あまたかかる事言ふ人々の中に、この君は人柄も目安かなり、心定まりても、物思ひ知りぬべかなるを、人もあてなりや(東屋1795・5)

<この母君は、こうして言い寄ってくるたくさんの男たちの中でも、「この(少将の)君は人柄も無難のようだ。性格もしっかりしていて人情もよくわきまえているし、それに人品も高貴だ。>

38かしこく思ひくはたてられけれども、もはら本意なしとて、外様へ思ひなり給ふべかなれば、同じくはと思ひてなむ、さらば御心と許し申しつる」(東屋1805・5)

<(あなたは) 賢くご計画なさったけれども、(先方では) いっこうにそんなお気持はないとあって、よそにとお思いになるところを、同じことなら(こちらでと) 思って、それではご希望どおりにとお許し申しあげた>

39「『物へ渡り給ふべかむなり』と仲信が言ひつれば、驚かれつるままに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづあけよ」(浮舟1872・10)

<『どこかへいらっしやるようだ』と仲信が言ったので、びっくりしてそのまま出かけてきたので、ほんとにつらかった。とにかく開けなさい>

40「ゆゆしき身とのみ思う給へしみにしかば、細やかに見奉り聞えさせむも、何かはとつつましく過し侍りつるを、うち捨てて渡らせ給ひなば、いと心細くなむ侍るべけれど、かかる御住まひは心もとなくのみ見奉るを、うれしくも侍るべかなるかな。(浮舟1903・3)

<この私は忌まわしい(尼の) 身の上とばかり存じておりましたので、(女君にお目にかかり) こまごま見申しあげるのもいかがかと遠慮申して過ぎてまいりましたが、(ここを) お見捨てになって(京に) 移っておしまいになられますと、(私は) ほんとうに心細くなるでしょうけれど、こうしたお住いでは気がかりなことばかりお察し申し上げておりますと、(お移りのことは) うれしくございますよ。>

前述のベカメリのような、上接する表現に他者の心中を表すものは少ない。強いて挙げれば38くらいである。

ベカナリの多くは、人の話(噂)などから判断している。人の話、聴覚が証拠

性といえる。三宅 清（2005）でも触れたように、終止ナリに「話から判断している」場合がある。つまり、人の話が証拠ということである。41、42とも、漠然とした人の話（噂）が証拠である。

41この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそ、おほやけの御かしこまりにて、須磨の浦にものし給ふなれ。（須磨430・1）

<（そこへ）この君がこうして（近くに）ご滞在と聞いて、母君に話をもちかけて言うには、「桐壺更衣の御腹の、源氏の光る君が、朝廷に対するご謹慎とあって須磨の浦にいらっしゃるそうだ。>

42ほのかに人の言ふを聞けば、男といふものは、空言をこそいとよくすなれ、思はぬ人を思ふ顔に取りなす言の葉多かるものと、この人数ならぬ女ばらの昔物語に言ふを（総角1640・4）

<人の話しているのをそっと聞いていると、男というものは心にもないことを、もっともらしく言うものだそうだ。>

ベカナリと終止ナリとは、その証拠性に大きな差がない。どちらも聴覚を証拠にしている。しかしながら、終止ナリには、「人の話」ばかりではなく、ベカナリにはみられない「音」「声」を証拠として判断する場合も多い。それも聴覚を証拠にしているといえる。

43今夜は、まだ更けぬに出で給ふなり。御先の声の遠くなるままに、海士も釣すばかりなるも、我ながら憎き心かなと思ふ思ふ聞き臥し給へり。（宿木1728・14）

終止ナリとベカナリはその証拠性が類似しており⁽⁶⁾、より幅広い証拠性（「人の話」だけではなく「声」「音」なども含まれる）を有する終止ナリが存するために、ベカナリは発達しなかったのではないか。

6 おわりに

以上、述べてきたことを纏めると、次のようになる。

- 1 メリの意味は大きく婉曲と推定に分けられる。
- 2 メリの婉曲は、証拠性の在り様から大きく①視覚②知識が基になっている視覚③知識④状況に分類できる。各類型の意味は連続している。
- 3 メリの最も基本的な証拠性である①視覚は、ベカメリにはみられない。そこに証拠性の変質が指摘できる。ベカメリに特徴的なのは、他者の心中を推定（想像）する用法である。
- 4 3はベシの影響と考えられる。上述の他者の心中は、話し手、作者にとって不確かなことがらである。それがベシの意味の一つの推定、すなわち不確か

さを伴う意味に通じると考えられる。

- 5 ベカナリは用例数が少ない。その原因として、ベカナリと終止ナリの証拠性の一部との類似性が考えられる。

古典語の複合辞についての研究は少ない⁽⁷⁾。今後は他の複合辞に関しても考察していきたい。

注

- (1) メリの分類としては、中西字一 (1986) などがある。
- (2) テキストは『源氏物語大成校異篇』(中央公論社)に拠る。用例後の () 内は巻名、頁数・行数を示す。表記は適宜改めた。
- (3) 秋本守英 (1996) には、
地の文における「めり」の頻用も、語り手が、話の場面において、登場人物の心や様や、事柄の性質を語るという点で、当事者的表現の現れとしなければなるまい。
という指摘がある。
- (4) 次の例のように、話し手が自分自身のことをメリと判断している例もある。
* 「亡くなり侍りし程にこそ侍りしか。それも女にてぞ。それにつけて、物思ひのもよほしになむ、齡の末に思ひ給へ嘆き侍るめる」と聞え給ふ。(若紫161・14)
<亡くなりましたその頃に(生れ)ました。それも女の子で。それにつけても、心配の種になることと、私(尼君)が余命も短くなって悩んでおります・・・>
- (5) () 内の数字は用例数、数字のないものは各1例を示す。
- (6) ベカナリは会話文9例、心内文1例である。会話文が多いのがベカナリの特徴といえる。直前の会話文が証拠となっている場合が多い。その点で終止ナリの話をも証拠とする場合と重なる。
- (7) ナナリ、ナメリについて触れた論考には柴田 敏 (1994) がある。複合辞の研究は現代語が中心で、就中助詞を主とした論考が多い。

参考文献

- 秋山守英 (1996) 『仮名文章表現史の研究』(思文閣出版)
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)
- 柴田 敏 (1994) 「ナナリとナメリの<判断>について」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』(三省堂)
- 中西字一 (1986) 「個人的判断としての「めり」の推定—「けり」との対比—」『叙説 森重教授退官記念 国語国文学論集』
- 三宅 清 (1993) 「連語「べかめり」について—源氏物語を資料として—」『岡山大学 国語研究』第7号
- 三宅 清 (2005) 「推定の助動詞「めり」と「なり」の意味用法—証拠の在り様をめぐって—」『国語研究(國學院大學)』第68号